



営農NEWS



ナス土壌病害やセンチュウの防除対策

ナスは連作障害の出やすい作物とされており、その大きな要因の一つに土壌病害虫の発生があります。

県内のナス産地で問題となる土壌病害虫には、半身萎凋病、青枯病、ネコブセンチュウなどがあり、これらが発生すると生育不良やしおれ、枯死を招くことで大きな減収となります。

ナスの土壌病害虫を回避する手段として、輪作や土壌消毒、抵抗性台木の接木栽培が行われています。

このうち接木栽培は、土壌病害虫の発生を防ぐと共に、低温期における根の伸長促進や高温期の夏バテ抑制の効果なども期待できるものがあり、簡易で安定した栽培技術として一般的に導入されています。

しかし、優秀な台木でも連続使用していると発病させる菌の系統が新たに発生したり、半身萎凋病や青枯病では抵抗性というよりは発病を抑制する耐病性で、病原菌の汚染程度が高かったり、圃場環境が発病に好適な条件が続くと、台木に接いでいても発病してしまう恐れが高くなります。

このため、ナス栽培における土壌病害虫の防除対策を進めるうえで、以下の注意事項を参考にしてください。

【台木選定のポイント】

- 1 栽培予定圃場で発病が予想される病害虫の抵抗性または耐病性（表 1 を参照）や、栽培時期を考慮した低温伸長性あるいは夏バテ抑制、草勢や収量性などを総合的に判断して台木を選定しましょう。
- 2 半身萎凋病やネコブセンチュウに対しては、トナシム、トレロ、トルバム・ビガーなどが利用されています。
- 3 青枯病に対する抵抗力は、青枯病菌の系統（菌群）によって異なります。全ての菌群に対して耐病性を示す台木はなく、過去における台木の発病結果を考慮し、あわせて事前に土壌消毒を行って台木との併用による効果安定を図りましょう。

【土壌消毒のポイント】

- 1 施設栽培では、夏季の還元型太陽熱土壌消毒（処理法については、営農NEWS第 2288 号を参照）や土壌くん蒸剤消毒が有効ですが、露地栽培では土壌くん蒸剤消毒を行いましょう。土壌くん蒸剤として、基本的にクロルピクリン剤およびその混合剤の処理効果が高く、注入後は必ずビニール等で被覆をします。
なお、住宅地が周辺にある圃場などではガスタード微粒剤などを利用します。また、ネコブセンチュウが併発している場合は、ソイリンなどを利用することもできます。ネコブセンチュウの単独被害の場合は、DC油剤等の殺センチュウ剤を処理します。いずれも、防除効果を高めるためには適正な土壌水分や地温を確保することが重要で、秋～冬季に処理する場合には、被覆や処理期間を出来るだけ長期に保つ必要があります（各薬剤の処理法については、営農NEWS第 2242 号を参照）。
- 2 消毒後の再汚染を防止するため、処理後に圃場を耕起する場合は、ロータリー等の農業機械の土をよく洗浄して行いましょう。また、ハウスでは内周囲や支柱基部近く（30～40cm）など消毒が不十分と予想される（病原菌が残りやすい）部分を、処理後の耕起やベットづくりから外しておくことで効果が安定します。

表 1 ナス台木の土壌病害虫抵抗性（平成 26 年 茨城県農作物病害虫防除指針より）

台木の種類		青枯病	半身萎凋病	半枯病	ネコブセンチュウ
野生種台	ヒラナス（アカナス）			○	
	赤虎（アカトラ）	△		○	
	緋脚		△	○	
	トルバム・ビガー	△	△	○	○
	トナシム	○	△	○	○
	トレロ	○	△	○	○
	カレヘン	○			
種間雑種台	耐病VF茄		△	○	
	ミート	△	△	△	
	くろがね1号			○	
	アシスト	○		△	
	台太郎	○		△	
	台三郎	○		△	
	茄の命	○	△	○	
共台	興津1号など	○			

注) ○印は強い耐病性（ネコブセンチュウは耐線虫性）、△印は耐病性を表します

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040